

[107] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/19767>

出版情報：語文研究. 107, 2009-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

《會員著書紹介》

後藤昭雄 著

『本朝文粹抄二』

本書は、雑誌『アジア遊学』に、九十四号から百十三号（二〇〇六年十二月から二〇〇八年八月）まで、「続 本朝文粹抄」と題して一三回に渡って掲載された注釈と、機関誌『懷徳』七六号（二〇〇八年一月）に掲載された講演の筆録を、纏めたものである。『本朝文粹』には、平安朝期に作られた漢文四三二作品が収められており、本書は、その内の一四作品を注釈する。

はじめに

第一章 「冬日愛すべし」を賦す詩の序（橘広相）

第二章 南垂相山莊尚齒會詩の序（菅原是善）

第三章 庚申を守りて「脩竹冬に青し」を賦す詩の序（藤原篤茂）

（藤原篤茂）

第四章 勸学会所の日州刺史館下に送る牒（慶滋保胤）

第五章 飛州刺史の任に赴くに饒けする詩の序（大江以言）

以言）

第六章 春日の野遊の和歌の序（橘在列）

第七章 《意見封事》 売官を停めんと請ふ事（菅原文

時）

第八章 《落書》 秋夜懷ひを書す（藤原衆海）

第九章 天台座主覺慶の宋国杭州奉先寺の和尚に答ふる牒（大江匡衡）

る牒（大江匡衡）

第十章 四条大納言の為の中納言左衛門督を罷めんと請う状（大江匡衡）

請う状（大江匡衡）

第十一章 員外藤納言の為の美福門の額の字を修飾せんと請ひて弘法大師に告す文（大江以言）

第十二章 勸学院仏名の廻文（慶滋保胤）

第十三章 二品長公主の為の四十九日の願文（慶滋保胤）

第十四章 在原氏の亡息員外納言の為に四十九日に諷踊を修する文（大江朝綱）

を修する文（大江朝綱）

作者略伝

本朝文粹作品表

索引

第一章から第十四章に各一編を宛てる。「作者略伝」では本書でとりあげた九名を紹介し、合わせて、全四三二篇の「本朝文粹作品表」と索引を付す。

（平成二十一年二月 勉誠出版 四六判 二一九頁 二、九四〇円）

白石良夫〔編〕

『かなづかい入門』

—— 歴史的仮名遣 VS 現代仮名遣 ——

あらゆる字間の規範と規則は、その時代の都合によって、あるいはその及ぶ範囲の都合によって書き換え可能なものである。本書は、このような視点に立つて、歴史的仮名遣と現代仮名遣の、それらの成立の歴史および運用のありかたについて論じるものである。各章には、今までの先行論点に対する周到な目配りだけでなく、著者独自の斬新な観点も多く示されている。そこには、著者の「各時代における仮名遣の使用意識」に対する関心が表れている。

目次を挙げれば以下の通り。

はじめに

第一章 以前——日本語の音とその表記の歴史

第二章 生みの親は定家——仮名遣の誕生

第三章 学問的根拠は絶対か——定家仮名遣の論理

第四章 いにしえびととの交感——契沖仮名遣の世界

第五章 悪魔の規範——歴史的仮名遣の非実用性

第六章 残された課題——現代仮名遣解説

第七章 伝統を捏造するな——文化人たちのノスタルジー

第八章 新仮名遣で古典を書く——表記の規則だから

注

あとがき

参考文献

附録

最初の四章は、仮名遣とは何かという問題について、その誕生から今日までの軌跡を辿ることによって、分かりやすく書いているものである。また、第五章～第八章において示された論が、上述した仮名遣の使用形態に対する著者の独自の見方を詳述したもので、仮名遣の研究史上に銘記されるべきものだろう。仮名遣研究に興味を持つ方々には、ぜひとも本書を繙いてほしいものである。

(二〇〇八年六月二三日 平凡社 新書版 二四〇頁 七七七円)